

嶺南日報

慰安婦問題、韓・日の元老があつて必ず解決を

小松昭夫氏と日本市民団体関係者など大邱慰安婦歴史館を訪ね、‘明らかに誤った事’と表明

先日、2日の午後2時、大邱慰安婦歴史館建立敷地（中区西門路チャンシン商会）の建物に懐かしいお客様が訪れた。日本内の良心的な知識人で知られた小松昭夫（財）人間自然科学研究所の理事長と日本の市民団体‘輝く未来を考える女性の会’の会員等6名である。



歴史館の内部は、まだ建立費用準備不足で、ろくな展示品が一つも無い。しかし冷たい建物の内部は、彼ら日本人の訪問により、熱気があふれるほどであった。

本来、ここは日帝強制占領期の1930年代、日本人が残した敵産家屋で、当時は近所の料理家で働く女性にチャンゴ（杖鼓）や太鼓・小鼓を売っていた店である。今は歴史館建立のため、慰安婦のお婆さん達が作ったパウチ・プレスレッドなどを保管する臨時倉庫として使われている。

日本軍慰安婦被害者の李容洙様（86歳）もこの訪問者を迎えるため、わざわざ席を共にしてくれた。彼女らは歴史館の敷地を隅々見回し、また一度痛い過去を反芻した。

慰安婦歴史館敷地付近のあるカフェで日本訪問団一行とお婆あさんは一時間半くらいの時間、ささやかな懇談をもった。この場で小松理事長は、‘日本軍慰安婦問題は過去のことではあるが疑うことなく間違った事であり、持続的に関心を持って解決しなければならない問題’と言い、‘発展的未來と世界平和のためにも両国の元老が合つて必ず解決しなければならない’と強調した。

特に小松理事長は、「お婆さんが15歳に慰安婦として連れていかれ、過酷な経験をされたのにもかかわらず、大学院まで進学して勉強し、水曜デモにも積極的にご参加されることを拝見し、とても感銘を受けましたと」敬意を表した。

これに対し李お婆さんは、「慰安婦歴史館の建立に関心を示されてとてもありがたい、これから韓国の政府と地方自治体もこの問題にもっと関心を持ち、積極的に支援するべき」と述べた。

懇談会の後、日本訪問団の女性3名は、李お婆さんを囲んでしばらくの間、和気あいあいとした雰囲気をつくった。

お互いそれほど多い会話ではなかったが、顔の表情やジェスチャー一つ一つをみれば、この日の出会いに、いかに真実性を醸しだしたか、推し量ることができた。

(写真) 朴真観記者 安キョンウク・挺身隊お婆さんと共にする市民の会の前期代表(左から2番目)が、2日歴史観建立敷地のチャンシン商会の建物を訪れた小松昭夫(財)人間自然科学研究所の理事長を始め、日本人平和主義者へ歴史館建立背景について説明している。

<http://www.yeongnam.com/mnews/newsview.do?mode=newsView&newskey=20131104.010070759090001>

(記事) 崔美愛記者

※敵産家屋とは、
自国または占領地内にある敵国の財産

毎日新聞

大邱で慰安婦の事を謝罪した日本の良心

独島問題で摩擦を起こしている日本の島根県の、良心的な知識人と市民団体関係者らが、大邱を訪問し、過去日本の過ちに対しお詫びを伝え、慰安婦のお婆さんを慰労・激励した。

島根県の小松昭夫（68）（財）人間自然科学研究所理事長と、輝く未来を考える女性の会など8名は、2日、李容洙お婆さんと共に慰安婦歴史館建立の現場を回った後、慰安婦被害者の痛みに共感し、これから歴史館建立など、問題解決のために声を一つにすると約束した。



このたびの訪問団を引率した小松昭夫理事長は、「日本政府はお婆さん達が生きているうちに強制動員と歴史的責任を認め・謝罪をするべきである」とし、「慰安婦問題を過去歴史や両国間の問題だけではなく、平和と人権の問題と見ており、そのことが一致する時、手を結ぶ事が出来る」と述べた。

小松昭夫理事長は、韓・中・日3国が共存と共滅の重要な転換期にあると指摘した。彼は「日本の中で集団的自衛権を推進しようという世論が高まり、韓国と中国など周辺国と敵対関係を作っている」とし、「このような国民情緒の中で安倍政権が誕生しており、すでに明らかになっている過去の過ちも認めていないことが、（両国間を）疎遠にさせている」とした。

小松理事長は、また「このような暗鬱な状況の中でも慰安婦歴史館建立は、過去戦争の惨状を告発し、被害者の痛みを慰めることが出来る、小さいながら大切な実践」といい、共感の意を示した。

この日、日本の訪問団と日程を共にした李容洙お婆さんは「慰安婦問題は日本が責任を取らなければならないと堂々という、日本の良心的な人たちが慰安婦被害者の話を聞きに訪ねてきてくれたことはとてもありがたいこと」とし、「今回の訪問を通じて韓国と日本の政府や市民が、もう一度、慰安婦歴史館建立の意味と重要性を知らせる機会となります」と言った。

日本の良心的知識人と市民団体の関係者らの今回の訪問は、今年8月、島根県を訪問した大邱地方弁護士会平和使節団の招待によるものである。平和使節団は慰安婦問題を否認する安倍内閣の過ちを是正するように求める意見書を発議した新日本婦人会と、これを議決した島根県議会に感謝の意を伝えるため日本を訪問した。その当時、小松昭夫理事長は韓国からの平和使節団を招待し、慰安婦問題解決と韓・日関係改善のためのシンポジウムを開催したことがある。

方文一・大邱地方弁護士会独島委員長兼平和使節団長は、「独島問題で交流が切れた島根県の良心的な知識人を市民団体の訪問を通じ、歴史の傷を慰労し、お互いの理解の幅を広げる

契機となった」と話した。訪問団は、この日、嘉昌面（カチャン町）友鹿洞（ウロク）のサヤカ村と寿城池の水崎林太郎墓など、大邱地域で活動した日本人の跡を見学後、3日、日本へ戻った。

※写真

大邱を訪問した日本島根県の良心的知識人と市民団体関係者などが、大邱中区にある慰安婦歴史館へついて、説明を聞いている。

記事と写真 ソガンホ記者

http://www.imaeil.com/sub_news/sub_news_view.php?news_id=54582&yy=2013

日本の知識人「慰安婦歴史館、建立支援」



日本の良心的な知識人たちが大邱市で慰安婦被害者お婆さんと会い、慰安婦歴史館建立支援を約束した。（財）人間自然科学研究所（理事長・小松昭夫）を始め、輝く未来を考える女性の会関係者の6名は、2日 大邱市中区西門路に位置する日本軍慰安婦歴史館の敷地を訪ねた。

彼等はここで 李容洙慰安婦お婆さん（86）とあって、慰安婦問題解決について会話をした。

この懇談会で小松昭夫理事長は「慰安婦歴史館建立を肯定的に見ている」とし、「建立にはできる限りで最善をつくす」と表明した。小松昭夫理事長はまた、「日本では、韓国との間で、100年戦争になるような国民情緒と世論が形成されつつある」とし、「このままに行くと平和のところか共に滅亡する可能性もある」と指摘した。

人間自然科学研究所と。輝く未来を考える女性の会は、8月、大邱地方弁護士会平和使節団が慰安婦問題で島根県を訪問した際、多くの助けを受け、今回は感謝の意味で招待を受けた。

小松昭夫理事長は、1997年韓国独立記念館を訪問し、日本人としては初めて献花と寄付をし、1998年には大韓赤十字社を通じ北朝鮮に食料を支援したこともある。

彼らが訪問した日本軍慰安婦歴史館は2010年1月、金スnakお婆さんが亡くなる前、慰安婦記念館建立に使ってくれるようにと5千万ウォンを寄付することから本格的に推進された。

市民会は、市民からの募金で、今年7月 大邱市中区西門路に位置するチャンシン商会（119平方メータ、地上2階）建物を購入した。

「挺身隊お婆さんと共にする市民会」の安キョンウク（元）代表は、「歴史館建立に必要な

5億ウォン中、半分が集まった状態であり、本の販売など多様な活動を通じて基金を集めている」といい、「しかし時間が経つにつれて募金額が減少していて、歴史館完成に苦勞をしている」と述べた。

※写真

先日の2日、李容洙慰安婦お婆さんと日本の財団法人人間自然科学研究所及び輝く未来を考える女性会の関係者らは大邱市中区西門路に位置する日本軍慰安婦歴史館の前で記念撮影をした

http://www.idaegu.com/?c=6&sort=d_regis&orderby=desc&uid=267554